

四国沖に埋蔵される次世代燃料 燃える氷 メタンハイドレート

四国経済連合会常任理事
(入交グループ本社(株)代表取締役副社長)

入交 章二



日本がブルネイや中東のようなエネルギー資源国に変身できれば、国の産業構造自体を大きく変革し、平成生まれの若者たちに夢を与えられるチャンスです。それも次世代燃料が四国沖に大量に埋蔵されていると聞けば、捨て置くわけにはいきません。

高知一県だけでは手が届かないであろうメタンハイドレート産業の誘致も、産業集積に富んだ愛媛・香川・徳島の三県と一丸となって四国州レベルで取り組めば、大いに可能性を秘めたプロジェクトであろうと感じます。

メタンハイドレートの可能性と開発進捗について素人勉強の範囲で恐縮ですが、ご紹介をさせていただきます。

メタンハイドレートとは

メタンガスが水分子とともにシャーベット状に凍ったものです。

土佐湾沖の海底、南海トラフと呼ばれる海域に広く分布していると考えられ、日本周辺海域のメタンハイドレートに含まれるメタンガスの総量は推定7.4兆立米で、日本の天然ガス消費量のなんと約100年分との試算もあるそうです。実に夢のあるお話です。

開発状況

わが国は今から8年前の2001年に商業的産出の技術整備を目的とした開発計画を策定。凍ったメタンをガス化して海底から経済的に自噴させる技術開発を進めています。各国が技術開発

競争をする中、2007年には地中から連続して産出する実験に、世界で初めて成功したとの報道です。

モデル調査された東部南海トラフ海域だけで1.1兆立米(日本の天然ガス消費量の約13年分)の埋蔵総量が確認されており、石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC)が2018年の商業化を目指して研究に邁進しているとの情報です。

メタンハイドレート産業の誘致活動については、現時点では和歌山県が先行しています。地元選出の議員さん方が先見の明をもって熱心に活動されていることをはじめ、やはり需要地に近いという優位性もあるでしょう。

一方で四国の優位性は、高知龍馬空港の隣にある海洋研究開発機構と高知大学海洋コア総合研究センターが共同運営する「高知コアセンター」です。同センターは多国間国際協力プロジェクトである統合国際深海掘削計画(IODP)における世界3大拠点の一つで、7000mの海底からコアを掘削できる「地球深部科学探査船ちきゅう号」が採取したサンプルコアが持ち込まれ保管・研究される、世界トップクラスの研究者が集う研究施設です。

「研究は高知で、そしてメタンハイドレート基地は瀬戸内圏・関西圏の需要地に近く、地元の産業集積もしっかりとした愛媛・香川・徳島で」。今から四県一丸となった取り組みができれば、道州制スタート時の四国州の強力な地域産業に育てられるのではないのでしょうか。